

訪問記

フィリピン現地調査報告2015

中村学園大学 流通科学部

山 田 啓 一

平成27年8月7日から平成27年8月21日まで、フィリピンにおいて現地調査をしてきた。本稿では、その結果を報告する。

1. 日程

8月7日（金）

福岡発（15:25）マニラ着（18:00）Makati市BSA Tower 宿泊。

8月8日（土）

Intramuros 視察後、Tagaytay 視察。

8月9日（日）

Bulacan 州 San Jose Del Monte の貧困地域を視察。

8月10日（月）

Uniquese Restrant 訪問、中村八千代代表と面談。

8月11日（火）

JETRO Manila 訪問。石川雅啓氏と面談。

8月12日（水）

iCube（フィリピンへの進出や投資等のコンサルティング会社。ベンチャーのインキュベーションも行っている）訪問。坂本直哉代表と面談。

8月13日（木）

Greenbelt Shopping Mall の National Bookstore と Power Book にて文献収集（Doctor to the Barrio 他）。

8月14日（金）

Gawad Kalinga Ateneo de Manila を訪問し、Noi Quesada 氏と面談。

併せて、Ateneo de Manila University School of Social Science Department of

Economics を訪問し、Philip Arnold P. Tuano 教授（開発経済学の専門家）と面談。

8月15日（土）

クラーク経済特別区（Clark Economic Zone）視察。

8月16日（日）

マニラ発（10:20）ダバオ着（12:05）。Hotel Galeria 宿泊。

8月17日（月）

Davao 市の北の郊外にある Kapalong（車で片道2時間）のバナナ農園を視察。

8月18日（火）

Ateneo de Davao University Mindanao Economic Center を訪問、Germelino M. Bautista 教授と面談。

8月19日（水）

ダバオ発（06:05）マニラ着（07:45）。

Makati 市 BSA Tower 宿泊。Ateneo de Manila University School of Social Science Department of Economics を訪問し、Philip Arnold P. Tuano 教授（NGO 研究の専門家）と面談。

8月20日（木）

フィリピン日本人商工会議所（JCCIPI）訪問。藤井伸夫副会頭と面談。

8月21日（金）

マニラ発（09:45）福岡着（14:25）。

2. 主な調査内容

以上が、今回の活動内容であるが、つぎに今回とくに注力した現地調査について述べたい。今回の活動では、ガワッドカリンガ・アテネオ、

北ダバオのバナナ農園訪問、ミンダナオ経済センター訪問（とくにマイクロクレジットであるCARDについて）、ユニカセ・オーガニックレストラン（ストリートチルドレンを引きとって仕事をしながら更生させる）など、を主として行ったが、このうち、ガワッドカリंगा・アテネオと北ダバオのバナナ農園訪問について、報告を行いたい。

（1）ガワッドカリंगा・アテネオ（Gawad Kalinga Ateneo）¹

ガワッドカリंगा（Gawad Kalinga、以下「GK」）は貧困問題解決のためのフィリピン最大の非政府組織（NGO）の一つで、多様な組織のネットワークにより形成されている。今回訪問したのは、アテネオ・デ・マニラ大学の組織（GK Ateneo）である。常任理事である Noi Quesada 氏と面談を行い、GK の活動内容、歴史、今後の課題・戦略等について説明を受けるとともに、私の研究課題である、貧困克服のための SPI モデル（Survival→Participate→Independent の3段階モデル）と NGO の役割について議論を行った。

午前10時に訪問したが、昼食をはさんで3時間超の面談となった。なお、アテネオ・デ・マニラ大学ロヨラキャンパスがあるケソン市は、私が宿泊したマカティ市より車で1時間ほどかかる場所にある（マニラ首都圏では交通ラッシュが状態化しているので、1時間からときには1時間半ほどかかることもある）。因みに、アテネオ・デ・マニラ大学は、デ・ラ・サール（De La Salle）大学とフィリピンの私学のトップを競う一流大学である。

もともと GK アテネオは、ジョン・ゴコンウェイ経営管理学部長のダーウィン・ユウ（Darwin Yu）教授に紹介していただいたもので、今回はユウ教授が不在のため、社会科学部

教授のフィリップ・アーノルド・P・ツアノ（Philip Arnold P. Tuano）氏が面会をアレンジしてくれた。因みに同氏は、フィリピンにおける開発経済学の専門家である。

GKは、1995年12月にカロオカン市（Caloocan City）バゴングシラング（Bagong Silang）を中心にトニー・メロト（Tony Meloto）氏により活動が開始された。因みに、バゴングシラングは、偶然にも昨年、筆者が現地調査を行った場所でもある。最初に、現地の非行少年や暴力団員を中心とする127名の青少年のキャンプを開催することから始まった。その後、ミュージカル「バゴングシラング」やGK住宅（住宅建設サービス）等の活動を通じてバゴングシラングでの支援を行った。2000年には最初のGK賞が創設され、11のチームによりバゴングシラング郊外にGK村が開設された。2002年には、アロヨ前大統領が1,000軒のGK住宅のために、3千万ペソの予算措置を行った。

GKはその後も発展を続け、2003年にはコラソン・アキノ元大統領が「GKはピープル・パワー²」とまで言わせしめるに至った。2004年～2006年には、GK村の建設を中心に活動を進め、フィリピンだけでなく、インドネシア、パプア・ニューギニア、にも活動の輪を広げた。このため、2006年にはアジアのノーベル賞であるマグサイサイ賞を受賞した。

2007年にはカンボジアにも進出した。2009年までは主として住宅建設を中心とした活動が行われてきたが、2009年には農業部門を新設し「バヤン・アニハン（Bayan anihan）」という食料供給プログラムを開始し、また台風「オンドイ（Ondoy）」の被災者に対して「オペレーション・ワラング・イワナン（Walang Iwanan）」すなわち「誰も置き去りにしない」というプログラムを開始した。

1 以下は、GK Annual Report July 2013-June 2014を参照した。

2 ピープル・パワー（People Power）は、コラソン・アキノ元大統領を中心として行われたマルコス元大統領を追放するための無血革命をさす。

2010年には、社会的企業促進のために GK のパートナーとして GKconomics を開設し、2011年には、同様に GK Center for Social Innovation を設置して、社会的企業50万社を設立することを目指した。2012年には、台風「センドン (Sendong)」の被災者の支援も行った。2013年には、バヤニ・チャレンジ2013 (Bayani Challenge 2013) で、8万人のボランティアが全国37のサイトに向かった。2014年にはスーパー台風「ヨランダ (Yolanda)」の被災者のために10万袋以上の支援パックが配られ、3年間で2万戸の住宅再建が提唱された。

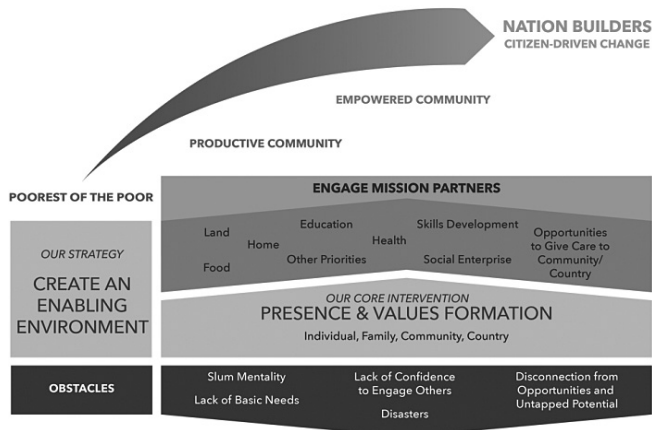
GK のビジョンは、「GK は、信念と愛国心を持った人々によって力づけられた国を建設する。コミュニティをケアし、共有することにより成り立つ国、貧困を撲滅し、人間の尊厳を回復するために献身する。」とされ、また使命は「2024年までに5百万家庭の貧困を終了させること」である。なお、GK は、つぎの5つを自分たちの信条としている。

- ①Padugo, Tataya Ako (使命を果たすことコミットする)
- ②Una sa Serbisyo, Huli sa Benepisyo (サービスを受けることよりもサービスをするにコミットする)
- ③Para sa Diyos at Para sa Bayan (神と

祖国を愛することをコミットする)

- ④Bayanihan (他の人たちと連帯して困難に挑戦することをコミットする)
- ⑤Walang Iwanan (誰も取り残さないことをコミットする)
ガワッドカリングの活動は、ホリスティックなアプローチをとり、現在ではつぎのような活動を行っている。
- ①Community Infrastructure (コミュニティの社会基盤)
- ②Community Health—GK Kalusugan (コミュニティの健康)
- ③Tourism—GK Mabuhay (ツーリズム)
- ④Food Sufficiency—GK Bayan-Anihan (食料の充足)
- ⑤Child & Youth Development (子供と青少年の発育)
- ⑥Social Entrepreneurship—Gknomics (社会企業家)
- ⑦Environment—Green Kalinga (環境問題)
- ⑧GK Builders Institute (建設者の研究所)
ガワッドカリングについては、図表1に示す GK Model に基づき活動が展開されている。GK Model においては、まず貧困者の中で最も貧しい人びとが貧困脱却をするための環境整備をすることから始まる。そして GK Model で

図表1 ガワッドカリングの開発モデル



(出所 : <http://gk1world.com/our-model>、2015年10月31日参照)

は、生産的なコミュニティ (Productive Community)、権限を委譲されたコミュニティ (Empowered Community)、市民による変革 (Citizen-driven Change) の3ステージモデルを通じて、最も貧しい人たち (Poorest of the Poor) を建国者 (Nation Builder) に育てていくことを目標としている。

3ステージモデルにおける活動は、第一ステージでは土地、食料、家といった生活の基盤を提供し、第二ステージでは教育、健康、技能開発、社会企業、その他必要なもの、を提供し、第三ステージではコミュニティや国のケアを行う機会を提供することと、なっている。このような活動におけるGKの主要な関与は、個人、家族、コミュニティ、国のあり方と価値の形成であり、3ステージモデルにおける障害 (obstacle) としては、第一ステージではスラムのメンタリティ、基本的ニーズの欠如、第二ステージでは他の人びととのかかわりへの自信の欠如、災害、であり、第三ステージでは機会や未開発の潜在能力からの切斷、とされている。

写真1 ガワッドカリング・アテネオを訪問して



(2) ミンダナオ島北ダバオ州バナナ農園訪問

2015年8月17日、北ダバオ (Davao del Norte) 州、Kapalongにある独立系のバナナ農園を訪問した。本農園は、福岡在住のOさんのご実家で、筆者が宿泊したDavao Cityか

ら車で約2時間の距離であった。Oさんの甥のRさんと姪のAさんがホテルまで迎えに来てくれ、Rさんの運転で現地に向かった。

ダバオ市を出て、パン・フィリピン・ハイウェイ (Pan-Philippine Highway) を北上し、パナボ (Panabo) 市にある囚人の流刑地 DaPe Col (Davao Penal Colony、以下「ダペコ」) に到着した。標識には“Prison Farm (「囚人農場」)”とあり、ただならぬ雰囲気が漂っていた。有刺鉄線で囲まれたフェンスから、当初は労働者が囚人のように扱われ、逃亡ができない過酷な農場なのかと考えたが、実はそうではなくて本当の囚人の収容所であるとのことであった。なお、ダペコ流刑地は、もともとアバカ麻 (マニラ麻) 栽培のために入植する戦前日本人の浸食を避けるためにつくられた流刑地とのことである (鶴見1982、p.218)。

隣接するタデコ (Tadeco) 農園は、マルコス元大統領と同郷のフロイレンドー一族が所有する農園で (鶴見1982、pp.112-114)、チキータバナナで知られるユナイテッド・ブランズ社の提携農園であるが、ここではコロノ (colono) と呼ばれるダペコの受刑者が超格安の賃金でこき使われているという (鶴見1982、176頁)。

パナボ市で左折、タデコ道路 (Tadeco Road) に入り、さらにタグムーパナボ循環道路 (Tugum-Panabo Circumferential Road) を北上し、サントトーマス (Santo Thomas) を経て、カパロングータラインゴッドーバレンシア道路 (Kapalong-Talaingod-Valencia Road) を上って目的地であるカパロング (Kapalong) に到着した。

途中、見渡す限り果てしなく続く広大なバナナ農園の中を延々と進んでいく光景は壮大であった (写真2)。すれ違う車は少なく、バナナを運搬する大型トラックに時折出会うのみであった。

写真2 延々と続くバナナ農園



写真3 バナナにビニールをつける作業



写真4 たわわに実ったバナナの房



写真3は、バナナコンドームと呼ばれるビニールシートをかけていく（虫除けだけでなく日焼

け除けのためでもあるとのことである）作業を行っているところである。写真4は、ビニールシートの破れた部分から顔を出すバナナの房である。

世界中でバナナは約100種類存在するといわれているが、ミンダナオ島のバナナは、米国の農業資本が中南米で栽培していたバナナを改良したキャベンディッシュ（Cavendish）という品種である（鶴見1982、p.15、アジア太平洋資料センター1984、p.25、Koeppel 2008、pp.182-190）。この品種は、収穫量も多く、また害虫に強いという特性を有しているのが強みである（鶴見1982、p.6）。バナナの木とよくいわれるが、バナナは木ではなく、バショウ科に属する多年草の一種であり（鶴見1982、p.8）、また成長にばらつきが多くみられるため、収穫時期にもばらつきがある（鶴見1982、p.10）。このため、一年を通して季節を選ばずに収穫される果物である（鶴見1982、p.11）。農家にとってみれば季節性がないので、安定した収入を得られるという利点がある。

フィリピン産の日本向けバナナは1968年に出荷が開始され、1970年には輸入量の6.5%に過ぎなかったが、その後急増し、2013年には93%を占めるに至っている（日本貿易会2009、p.55）。

フィリピン産の日本向けバナナは、多国籍企業4社によって独占されている。すなわち、「デルモンテ」ブランドのデルモンテ社、「ドール」ブランドのキャッスル&クック社、「チキータ」ブランドのユナイテッド・ブランズ社（以上、米国）および「バナンボ」ブランド（現グレイシオ、中村2006、p.30）の住友商事である（鶴見1982、pp.102-103、アジア太平洋センター1984、p.12）。

ミンダナオ島におけるバナナの生産は、上記4社の多国籍企業が運営する直営農園が中核であるが、そのほか、フィリピン地主や地場資本の大農園、外資農園と契約してバナナを栽培、納入している自営農家、により複合的に生産されている。そして、これらの農園・農家では、

フィリピン人労働者が働いているという構造になっている（鶴見1982、pp.191-194）。

Ｏさんのご実家は、以上のうち自営農家に該当するものと考えられる。Ｏさんのご実家の農場は、バナナ農園のほか水田を有しており、二期作で米の生産も行っている。米は自家消費が中心であり、主な収入はバナナから得ているとのことであった。

Ｏさんのご実家では、到着後、Ｏさんの家族のみなさんに自己紹介を兼ねて挨拶をしたあと、バナナ農園を案内していただいた。昼食は、バナナの葉を容器にしたミンダナオのごちそうをいただいた（写真5）。なお、食後にいただいた小粒のモンキーバナナは1本1ペソ（約2円75銭）とのことであった。

写真5 バナナの葉を使った食器とごちそう

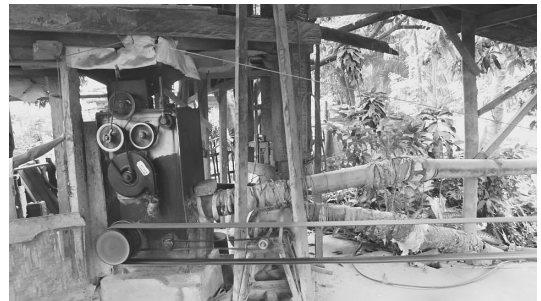


昼食後は、一休みした後、水田、バナナ農園のほか、近隣のご家庭を訪問して、お話しを伺うことができました。いずれも、独立系の農家であってフィリピンの農家としては、裕福な方であると感じられた。

写真6 Oさんの水田



写真7 米の脱穀機



3. その他の活動と今後の予定

(1) ミンダナオ経済センター (Mindanao Economic Center)

8月18日午前10時に、アテネオ・デ・ダバオ大学ミンダナオ経済センターを訪問し、ジャーメルノ・M・バウティスタ (Germelino M. Bautista) 教授と面談し、ミンダナオ島の経済情勢および同教授の活動の一部である The CARD (フィリピン最大のマイクロファイナンス組織) に関わる情報をいただいた。同教授の紹介で来年3月に The CARD の理事長であるジャイム・アリストテレス・B・アリップ (Jaime Aristotle B. Alip) 博士と面談することになった。

(2) アテネオ・デ・マニラ大学社会科学部経済学科 (Department of Economics, School of Social Science)

8月19日午前10時にアテネオ・デ・マニラ大学社会科学部経済学科にツアノ教授を訪問した。同教授はフィリピンにおける非政府活動組織 (NGO) 研究の専門家であり、GK のノイ・ケサダ (Noi Quesada) 理事、ミンダナオ経済センターのバウティスタ教授を紹介していただいた。今後も継続的に連絡を取り合い、協力しあうことで合意した。なお、同教授には8月14日に GK アテネオ訪問時にも挨拶を行っている。また、今回は日程の関係でお会いすることができなかったが、フィリピン農村再建運動 (PRRM: Philippine Rural Reconstruction

Movement) の副総裁であるベッキー・マライ (Beckie Malay) 副総裁を紹介していただいた。次回お会いする予定である。

(3) JETRO Manila

8月11日10:00に日本貿易振興機構(ジェトロ) マニラ事務所を訪問し、石川雅啓氏と面談した。同氏より、まずジェトロが提供しているブリーフィングサービスによりフィリピンの概況をうかがった。その後、フィリピンの現状についてより踏み込んだ情報の交換を行った。日系企業のフィリピン進出も増加しているとのことであった。

(4) フィリピン日本人商工会議所

日程の関係で、8月20日の午後3時に訪問して、藤井伸夫副会頭と面談を行った。藤井副会頭とは以前にもお会いしており面識があったが、フィリピンにおける最近のODAなどの大規模プロジェクトのほか、1時間30分にわたって地域の様々な情報を提供していただいた。

(5) ユニカセ (Uniqucase)

ユニカセは健康志向のオーガニックレストランであるが、NPOから預かったストリートチルドレンを仕事を通じて社会人に育成していくというユニークな活動を行っている。代表の中村八千代さんとはiCubeの坂本直哉さんに紹介していただいた。マニラ首都圏のゴミ山パヤタスおよびカシグラハンで子供たちおよびママさんの支援活動をしているソルトパヤタスの小川恵美子さんとも仲間である。今回は、8月10日にマカティ市にあるユニカセのお店で面談させていただいた。活動の詳細は、別の機会に譲ることにする。

(6) iCube

iCube代表である坂本直哉さんは、京都大学大学院修士課程を修了され、米国の代表的な会計事務所であるプライスウォーターハウスに勤

務中にマニラ支店に配属となり、退社後は、マニラでフィリピン進出の企業や投資に対するコンサルティング業務を行っている。

独立行政法人国際協力機構(JICA)の仕事もされており、またハーバードビジネススクールの出先機関であるアジア経営大学院(AIM: Asian Institute of Management)にも関わられているとのことで、現地事情に詳しい専門家のおひとりである。

今回は、8月12日に同社事務所を訪問して、坂本さんが実際に現場で収集した各地の各種の最新情報をいただくとともに、筆者の最近の研究や筆者が収集した情報等についての意見交換を通じて貴重なアドバイス等も頂戴することができた。

4. おわりに

科学研究費助成金をいただけるようになり、筆者の研究は本格的になりつつある。今回の現地調査では、視察と面談、情報収集等が中心であり、大規模なアンケート調査等は行わなかったが、筆者の研究で示した貧困脱却のためのSPIモデルにおける仮説である中間貧困層の自立のために必要な支援について、GKの活動やマイクロファイナンスのCARD、都市の貧困問題の原因である農村の貧困問題と再建活動(PRRM: フィリピン農村再開発運動やダバオのバナナ農園等)についての現場の貴重な情報等を得ることができた。

今回の調査旅行の圧巻は、ミンダナオ島ダバオ市と北ダバオのバナナ農園訪問であったが、筆者がフィリピン帰国1か月後の9月21日にダバオ市の湾内にあるサマル島のリゾート施設で武装集団による外国人3人を含む観光客等4人の誘拐事件が発生した³。筆者が滞在した場所のすぐ近くであり、外務省の注意勧告が発令

3 外務省の海外安全ホームページ (<http://www2.anzen.mofa.go.jp/info/pcspotinfo.asp?infocode=2015C284>、2015年11月30日参照)にて、「フィリピン：ミンダナオ地方ダバオ州における外国人誘拐の発生に伴う注意喚起」が2015年9月22日に出されており、同11月30日現在でもまだ有効である。

され、11月末現在でも有効であるため、今回は訪問が難しいかもしれない（少なくとも注意勧告が解除され、安全が確認できまで渡航を控えた方がよいであろう）。

謝辞

今回の現地調査旅行は筆者の科学研究費助成金対象研究の一環として行われた。フィリピン側の関係者と面談は、アテネオ・デ・マニラ大学 (Ateneo de Manila University) のジョン・ゴコンウェイ経営管理学部 (John GoKongwei School of Management) の前学部長のアン教授 (現在は大学院の研究科長) および現学部長のユウ教授の仲介によるものが大きい。昨年の現地調査の際にユウ教授より紹介されたツアノ教授により、ガワッド・カンリンガのケサダ部長、アテネオ・デ・ダバオ大学ミンダナオ経済研究所所長のバウティスタ教授、をつないでいただいたことが大きい。

また、現地の日本人の方々との面談では、本学の中村芳夫先生のご紹介によるジェトロマニラの石川雅啓さん、フィリピン日本人商工会議所の副会頭の藤井伸夫さん、iCube 社の坂本直哉さん、ユニカセの中村八千代さん、ソルトパヤタスの小川恵美子さん、その他の方々は大変

お世話になりました。以上の皆様に感謝の意を表したい。

参考文献

- アジア太平洋資料センター編 (1984) 『フィリピンはもっと近い』 第三書館
- 鶴見良行 (1982) 『バナナと日本人—フィリピン農園と食卓のあいだ—』 岩波書店
- 中村洋子 (2006) 『フィリピンバナナのその後—多国籍企業の操業現場と多国籍企業の規制』 七つ森書院
- Koepfel, Dan. (2008). *Banana: The Fate of the Fruit that Changed the World*, New York, NY: Starling Lord Literistic, Inc. (黒川由美訳 『バナナの世界史—歴史を変えた果物の数奇な運命』 太田出版、2012年)
- 日本貿易会 (2009) 「会員トップインタビュー、バナナとともに65年、日本バナナ輸入組合理事長、株式会社ライフコーポレーション 会長、清水信次」 日本貿易会月報、2009年2月号、No.667、pp.54-57.
- Gawad Kalinga Web Site (<http://gk1world.com/home>、2015年10月31日)
- GK Annual Report July 2013–June 2014